



OTO

No.5
2023.1

一般社団法人 東京都作業療法士会 広報誌
編集：東京都作業療法士会 広報部
発行：会長 田中勇次郎

OTOの由来

音といえば、音楽をイメージする方が多いと思います。しかし、鳥の鳴き声や電車の音など、私たちが生を受けた時から周囲にごくありふれて存在しているものです。

作業もまた『音』と似ています。作業というと、一般的には仕事をイメージする方が多いと思われる。しかし、作業もまた私たちが生まれた時から関りがあるものです。なかなか一般的に認知されにくい『作業療法』が、『音』のように一般の方にも広く認識していただき、広がっていくという願いを込めました。

多分野への作業療法士の挑戦

●はじめに

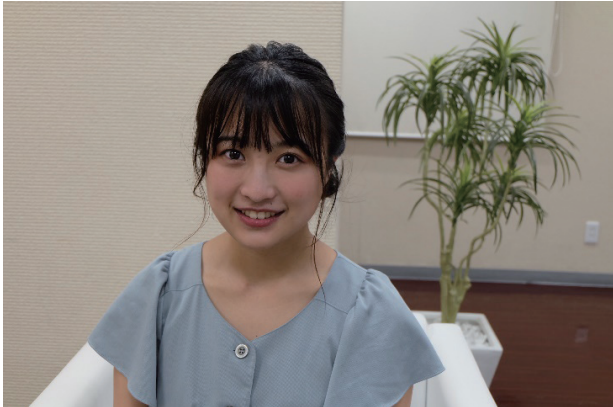
「作業療法士」は国家資格を持つリハビリテーションの専門職で、英語ではOT【Occupational Therapist】と言います。現在、約10万9千人の有資格者がいます。医療、介護、福祉、保健、教育、企業、司法など幅広い領域で従事しています。対象者への治療、予防的な働きかけや社会復帰支援、教育支援など何らかの理由で困難になってしまった作業活動を取り戻すための支援をしています。今回は芸能活動との両立、一般企業と連携し、化粧など身

なりを整えることを支援する活動を行なっている作業療法学科の先生、居酒屋併設の醸造所経営との両立を行なっている3名の方に登場いただき、OTが異分野に挑戦することにより、新たな活動の場を広げるきっかけになれば、と思います。まだ自分の職業選択に迷っている学生さん、異分野への連携を思案中の一般企業にお勤めの方、OTとして対象者への支援の可能性を広げたいと考えている方、必見です！

CONTENTS

- ◆OTOの由来
- ◆はじめに
- ◆インタビュー1 芸能活動と作業療法士の二刀流 竹野留里さん取材して…2～5
- ◆インタビュー2 ルックスケア研究会 石橋仁美先生取材して…6～9
- ◆インタビュー3 居酒屋併設の醸造所経営と作業療法士の二刀流 堀木慎太郎さん取材して…10～13
- ◆総括 多様な価値観の社会の中でこそ作業療法の魅力が映えるかもしれない（濱畑法生先生）…14～16

インタビュー① 芸能活動と作業療法士の二刀流、竹野留里さん取材して



竹野留里さんは、民謡全国大会で日本一に輝いたことに加え、テレビ東京系列のテレビ番組『THE カラオケ★バトル』にてU-18の四天王を獲得された経歴を持つ方です。

現在は、ホリプロに所属して芸能活動を行いながら、精神領域の病院で作業療法士として勤務されています。今回は、芸能活動や作業療法士を目指したきっかけ、両立の在り方、今後の展望などについてお話を伺いました。

2022年9月19日 対面にて

インタビュアー 東京都作業療法士会広報部 橋本奈実（文責） 水口寛子 山崎仁智

—民謡を始められたきっかけは何ですか？

私が4歳の頃に祖母が趣味で始めて、私は好奇心が旺盛だったので「私も行く！」と言って。母が練習しているのはずっと聞いていたので、それを先生の前で歌ったら、「こんなに小さい子がステージで歌っていたら面白いね」ってステージに立たせてもらったことがきっかけですね。

—ホリプロに所属された経緯は？

きっかけはカラオケバトルです。小さい頃から芸能活動にはすごく興味があって。カラオケバトルのプロデューサーさんに卒業後どうするの？と聞かれたときに、ミュージカルをやりたいんです、ということ伝えたらホリプロさんを紹介してもらいました。ミュージカルは全般的に好きで、どれを見ても、うわーすごい！踊りたい！歌いたい！って思うんです。国家試験のときもずっと「レ・ミゼラブル」の曲を聴きながら勉強していたくらい大好きです。

—なぜ作業療法士を目指されたのですか？

大学を卒業したら芸能の仕事をしたいという思いがあったんですが、芸能界は厳しい世界だと思っ

です。いくつになっても働ける、国家資格は取りたいと思っていました。音楽を使った仕事をしたいと思ってはいたんですけど、音楽療法は国家資格では無くて。そんな中で一番近い職種は何だろうと思ってみたらOTで。私にとって病院は無機質な印象があったのですが、OTを見ていくと、生活と融合させるような、人と人との寄り添える場所だと思いました。そういった音楽の面と、寄り添えるという面で魅力を感じて、OTをやりたいと思いました。よく入試で、どうして理学療法じゃなくて作業療法なの？って言われるんですけど、私は理学療法士になりたいと思ったことはありません！って（笑）どうしてそこって比較するんだらうと思うくらいOTを本当にやりたくてやっています。

—学生時代は音楽活動とどのように両立されていたか？

正直、5回休める授業は5回休んでいました（笑）先生方が本当に優しく、理解してくださった上でもうちょっと来たら？という感じでした。ただ3、4年生はほぼ歌をやっていないくて、国家試験や実習を本気でやるために歌の方は全部断っていました。

実習はレポートという苦痛に耐えながら（笑）人と話すことや患者さんと接することは好きで、授業を受けているより大好きなんですけど。

—実習中も歌を歌ったのですか？

そうなんです。リクライニング車椅子で寝ていた方に民謡を歌ったら目を開けて、あなたそれ上手いねと言ってくださり、口ずさんでいて。この方こんなに活動的になったことないよってバイザー（実習指導者）さんにも言ってもらえて。そんな力が私にあったんだなって思いました。身体障害領域も興味はありましたが、どちらかというが高齢期や精神の方にいきたいと思って、そこからずっと精神領域を探して就職活動をしていました。

—どのくらい作業療法の勤務をしていますか？

今は週3回くらいです。ありがたいことに融通を利かせていただいて、舞台の時は月3回くらいしか行けない時もあったのですが、それでも良いよと言ってくださって。領域は精神障害領域で働いています。カラオケのプログラムや、音楽療法もやっているのでも歌う機会が多いですね。民謡を歌うとすごく喜んでくださるので、民謡をやっているのが良かったなと思います。

—職場の方の反応は？

すごく芸能活動のことを応援してくださっています。急にオーディションが入ることもあるのですが、そっちを優先してくださいと言ってくださって。それでも、問題行動がみられる患者さんや、患者さん同士でトラブルになりそうなとき、竹野さんならどう思う？と一緒に考えていただけます。正社員とはまた別の枠組みにいるにも関わらず、そういう風に一員として活動へも積極的に参加させてくださっているのでも、素敵な職場だなと思っています。

—芸能活動と作業療法士の両立に迷いはありませんでしたか？

始めはそれこそ、ホリプロさんから声をかけていただいて、ホリプロで芸能活動をやっていたと思っていました。でもマネージャーさんが、せっかく資格を取ったのならOTもやってみなよと言ってくださって。その時に、その発想は無かった！と、芸

能活動をやりながらもOTをできるのは理想だと思いました。それが許されるのであればぜひやります！という感じですぐに必死に病院を探しました。

両親は、もともと芸能活動を反対していたのですが、せっかく声をかけてもらって、ずっとやりたかったことなのだから頑張って東京さ行ってこい！という感じでした。ただOTもやりますと言ったら、良いじゃない！って。良かったね～それこそ大学時代に描いていた理想の形じゃないって言ってもらえました。両親はOTって何？というくらい疎いんですが、仕事内容について話すと素敵な仕事だね、と言ってくれているので、こんな形にできて嬉しいと思っています。



—実際に働いてみてイメージ通りでしたか？

ほぼ思い描いている通りにいきました。ただ、舞台稽古が始まるとしばらくいなくなるので、患者さんと信頼関係を積み上げてきても、そこで心の距離ができてしまうことがあります。今は極力多めに行っていますが、自分の満足いくような関わりや活動ができるように葛藤中です。

—作業療法士をしていて芸能活動に生かしていることはありますか？

患者さんってすごくいろんな方がいるじゃないですか。特に精神科の方って、成長の過程や家庭環境によって、性格の部分で我慢ができないとか、少し自製の効かなくなる方もいると思うんです。そういうところを演技になると、なんでこの役はこう行動するんだろう？とOTの目線で見ることがあります。以前、サイコパスっぽい感じの役のときに、どうしてこうなったのかその背景を考えなさいって言われたのですが、この人はこういう人生を歩んできたのかもしれないと役作りをすることもあって。これは

OTの勉強をしていたからなのかなあとと思いますね。

—反対に、芸能活動が作業療法士に生かしていることはありますか？

病院の中では、私はあんまり嘘偽りないように接しているので、そんなにすごくないと思うものはむやみやたらに褒めないようにして。たぶん本人も自分がどれくらいのレベルでできているのかは分かると思うので。だからこそ、すごいねじゃなくて、前回よりこうなりましたよね！っていう本人の中の成長を言うようにして、そんなに演技をするということはないですね。音楽は本当にたくさんやっています。ギターを弾いたり民謡を歌ったり。あとは、ピエロというか、明るい感情でなくてもちょっとテンションを上げて出なきゃいけないことがあるので。そういう部分ではOTの中でも、音楽活動をやりますとなった時に場を盛り上げることもあります。OTとか音楽療法だけど、1つのステージみたいな感じで楽しみたいという部分もあるので、そういったスイッチが入れられることは、芸能活動が関係しているのかなと思います。

—芸能活動と作業療法士の両立をしている大変さや、やりがいは？

大変なところは、芸能活動とOTって時間帯が真逆というか。OTでは、私は朝8時までに行くように出勤しているんですけど、公演なんかは18時からとか、ステージが午後からとかなので。前の日の仕事が夜に終わってからすぐ朝出勤となるのは体力的にしんどいと思うことがあります。あとは、家に帰ってから患者さんの行動を考える為に教科書を見つつも、台本やオーディションの課題を平行してやる時は、あれもこれもやらなきゃいけないと慌てることはあります。ただ私は、自分のやりたいこと全部できてるじゃん！じゃあ全力で頑張ろう！と思えているので、嫌ではないですね。その大変さが逆に、今自分が頑張っている証拠だなと思えるので、楽しくやっています。逆に、芸能の仕事が全く入っていない、OTの仕事もやっていないとなると今の忙しさがありがたいです。

—例えば障害児と何か一緒にやってみたいことはありますか？

私は小児の実習に行ったことがないので、すごく分かるわけではないんですけど。ずっと思っていたのは、芸術の面ですごく長けている方が多くて、そういうものでコラボしてみたいという夢があります。小学校のとき支援学級の子がいて、すごく絵が上手で、たぶん今考えたら自閉症だったのかなって思うんですけど。繊細で音楽に敏感な子もいて。何か1つ動画を作るとすると絶対クオリティーの高いものができると思うんですよ。世間って偏見もあると思うんです。何か作業をやりますという時も、病気だから、障害があるからって別にされるのが私はすごく嫌なので。すごいところをちゃんと見て！っていう、お互いに言いたいことを言えるような環境や考え方になるようなことをしたいと思っています。

芸能界に入って思ったことは、「普通」は評価されにくく、一般では「変わっている」が個性としてすごく評価される部分があるので。そういったところを広げていきたいです。自分自身も抜けていることが多くてコンプレックスだったりもするんですけど、それを良いとか個性って言ってもらえることが多くて。そんな面も活かせるようなバラエティ番組も出演してみたいです（笑）。

—今後の展望を教えてください

正直、まずは芸能界で活躍できるようになることが今の直近の夢です。でもいつか、子供ができたりとか、芸能活動に区切りができた時に、OTをせっかく学んだからには正社員としてやりたいと思っています。

ただそうなったときに、自分にしかできないOTをやりたいという思いがあって、それってすごいOTの魅力かなと思っていて。お医者さんも看護師さんも理学療法士さんもこういう病気があるからこう治しますっていうプロセスが毎回どれでもあると思うんですけど、OTって本当に人それぞれだからこそセラピストの力量が試されるので、それを自分なりに、学んだことも踏まえてアプローチできるようなOTになりたいです。あと私は、卒論で音楽と精神の関係性を研究したんですけど、それを発展したようなことも追及してみたいです。

—OTを目指す人へメッセージをお願いします

私、OTで嫌な人に出会ったことがなくて。素敵な方ばかりですし、仕事としても病氣と向き合うのではなくて、人として向き合う部分が素敵だなと思っています。これはOTにしかできない仕事だと思うんです。具体的には言えないんですけど、魅力を伝えるってなると…。とにかく良い人いっぱいですよ！（笑）

OTを真面目に、職業として専門にやられている方の前で、まだ半年しかやってない私がこんなペラペラしゃべって恥ずかしいですけど（笑）

やる気、勇気、元気はあります！！

～取材を終えて～

OTってこんなに素敵だ。と、竹野さんの熱意溢れる言葉で改めて気づかされました。芸能活動と作業療法士、なかなか類を見ない二刀流ですが、どちらも多様性を尊重する共通点がありました。双方の強みを生かした竹野さんの前向きな活動に、今後のOT業界のさらなる可能性を感じます。（橋本奈実）

芸能活動もOTもどちらもできる全力で向き合っているのがとてもよく伝わってきました。その両立は竹野さんにしかできないな、と思いました。キラキラした表情でお話しされる竹野さんにまたいつかお会いしたいです！（水口寛子）



インタビュー② ルックスケア研究会 石橋仁美先生を取材して



いしばしひとみ
石橋仁美先生は現在、東京工科大学の教員をされています。化粧を中心としたルックスケアに関する研究に長年従事され、2022年9月にルックスケア研究会を設立されました。なぜ作業療法士がルックスケアを行うと良いか、企業との連携を含めた新しい分野に挑戦する時のポイントなどワクワクするようなお話をたくさん聞かせて頂きました。

2022年11月 オンラインにて

インタビュアー：東京都作業療法士会広報部 水口寛子（文責） 佐藤琴南 金澤均

石橋先生がルックスケアに関心を持った経緯を教えてください

精神科病院での実習で担当させて頂いた女性患者さんの話ですが、日中臥床傾向で長い髪もボサボサのまま経過され、整容やおしゃれに興味がないと言われていました。ただ、話をしていると、おしゃれの話題が出てきて、興味がない訳ではないと気づきました。患者さんは自分で髪形を整えるのが難しかったので、お団子ヘアなどお手伝いしました。するとすごく喜ばれて、廊下にある鏡を頻繁に見に行くようになり、消極的だったOT活動も人に見せるために参加するようになったんです。精神障害の方は身だしなみや衛生に問題がある方が多いと言われていますが、多くの方の根底には女性として綺麗になりたいとか、おしゃれへの関心はあるんじゃないかと思ったのがきっかけです。就職してからも感情失禁などがあり対応に難渋したのですが、鏡の前にお連れてしてブラシを渡すとご自身で髪を整えるようになり、身だしなみを整えるところからリハの導

入ができたということがありました。また精神科病院勤務の時に、大声を出されたり暴れてしまう方が、ご自身の姿が鏡で見えると、車椅子で仰反るように座っておられたのが、スッと姿勢を起こして、身だしなみを整え始めた、ということがありました。そういったエピソードにより、身だしなみを整えることは誰にでも根底として関心があるのではないかと興味を持ちました。

石橋先生は元々お化粧などに関心がありましたか

母親が人前に出る時にはきちんと恥ずかしくない身だしなみでいなさい、という考えの人でした。あとは中学生の時に元々地毛が茶色くて癖毛もあったのですが、あまり話したことがない先生から昔でいう不良という感じに扱われて厳しく対応されたことがありました。その先生の授業を真面目に受けて課題もきちんと出していると、できる学生なんだと思われて、対応がころっと変わったことがありました。人は見た目で判断することもあるのだと感じた

こともルックスケアへの関心に繋がっているかもしれません。

ルックスケア研究会を立ち上げられた経緯を教えてください

養成校に就職してから、化粧による心理的効果に関する先行研究などを参考にしながら化粧の研究を始め、2010年頃、日本顔学会という学会で事例発表をしました。その学会はOTや看護師さんも一切いなくて、企業とか心理系の方、イラストレーターの方、仏像の顔の研究者など色々な方がいる学会でした。そこで化粧品会社の研究員の方に興味を持って頂き、障害者の方に対しての化粧を用いた支援を確立していきましょう、というところから始まりました。

他職種による先行研究によって、化粧による心理的効果はすでに言われていましたが、効果が介入の時だけであったり、化粧技術を提供しても定着しない、ということが言われていました。そのため、手段としての化粧だけではなく、目的としての化粧に着目するようになりました。つまり、自宅や病棟で継続的に化粧ができるようにするためには、使いづらさや工程分析、環境設定や道具の選定を行うことができる作業療法士の強みが活かされると思いました。ただ化粧の専門家ではないので、その人に似合う化粧の方法などはわかりませんでした。プログラムで化粧を行なってせっかく気分が上がっても病棟や自宅に帰って「似合わないよ」「おかしいよ」と言われると効果が半減します。なので、失敗はあってはならないということがわかりました。そこでカネノウの方と相談しながら化粧のプログラムを開発しました。化粧が得意でない作業療法士も運営できるように台本のようなものも作っています。プログラム通りに行えば、どんな顔の形の方であっても不自然ではない化粧をすることができます。その研究は効果検証も終わっています。そういった活動を通して、化粧支援がしたいけれども方法がわからない、研修会はあるのか、というお問合せが全国から来るようになりまして。そこでルックスケア研究会を2022年9月に設立しました。研究会の意義は個人の悩みを情報共有して解決できることやOT以外の関連職種の方や当事者の方に作業療法士ができることを知ってもらえる、ということがあります。幸い

にも日本ルックスケア医学会という医師が関係する学会、協会が立ち上がっていますので、そこも連携、広報しつつ、作業療法として広げていきたいなと思っています。

化粧だけでなく、TPOに合わせた服装をすることもルックスケアですか

場に合わせて身なりを変えることは全てルックスを整えるということになり、それが難しくなった方に対して支援をするのはルックスケアだと思います。更衣動作の支援としては作業療法の教科書にたくさん書いてありますが、着やすいからという理由だけで前開きや首周りが開いた服を提案するのではなく、ご本人がどういったルックスで外に出たいか、人に会いたいか、ということが大事です。出かける時には髪型を整えていたけど、できなくなってしまった場合に、もっと簡単に髪型を整える方法を提案したり、人と会う時には大好きなこの服を着られるように支援したりすることが重要で、活動と身なりを結びつけることが大事だと思います。

その方にとっての身だしなみがいかに重要かを紐解いていく作業はどのように行いますか。

化粧に関して相談があった場合には応えられる必要があると思いますが、対象者さん自身もリハビリの中で化粧をすることを支援してくれると思っていないので、COPM（カナダ作業療法測定：OTで使用される対象者中心の作業療法を実践するための評価尺度）などを用いて聴取してもあまり作業として挙がりづらいと思います。そういう時にこちらから引き出す必要があると思います。ルックスケアは特別なものではなく、他の作業と同じようにフォーマルな面接でなくても何か他の作業活動をしながらでもいいと思いますが、具体的に話を聞くことが大事だと思います。例えば調理環境の評価では様々な情報を得ますが、それと同様です。化粧を行う環境は洗面所なのか、鏡台なのか、化粧道具をポーチに入れている、ペン立てに立てている、という方もいます。化粧をどこで購入していたのか。人によってはデパートじゃないとだめとか、ネットで購入するという人もいます。道具のこだわり、ブランドのこだわりなどもあると思います。ガラッとやり方を変えるのは難しいのでこれまでのやり方を確認しつつ、

今の機能でできる方法を考えるのが大事です。化粧品に興味がある学生などは特に、自分のやり方をそのまま対象者さんに伝えたりとか、こういうのがいいですよ、こうすると綺麗になりますよ、と伝えてしまいがちですが、自分の価値観は置いておいて、その方の価値観を大事にする必要があるかな、と思います。

高校生の興味はどうですか

本学では他の魅力ある研究分野が様々ある中で、化粧品も高校生には関心が高いようです。私のゼミの卒業生は、本当は美容部員になろうかと思っていたけれども作業療法士として化粧品の支援が学べるということで本学を選んで、OTを選んでくれた方もいます。最近もそのような動機で受験してくれる高校生が増えてきています。またオープンキャンパスの時に高校生やそのご両親も、作業療法士がおしゃれの支援をするというイメージが全くなかったので、すごく新しい、大事だなと魅力を感じてくださることも多いです。

大学の教育で化粧品のプログラムはありますか

1年次に男女問わず自分で化粧品を行う講義・演習があります。カネボウと開発した化粧品技術を使って教えており、化粧品経験がない方も自然な化粧品ができるようになっていきます。90分3コマを2週行い、1週目には化粧品を行い、2週目には実際に行った経験を踏まえて、片麻痺などの障害のある方を想定して化粧品のお店へ市場調査に行ってもらいます。1年次のうちなので障害像がなんとなくしか分からない状態ですが、片麻痺を想定し、この部分は片手では難しいんじゃないか、それを補うような化粧品はあるのか、と調査してもらいます。使いやすい商品が市販されていないければ自助具を考案する場合もあり、グループで発表してもらいます。その効果から卒業研究の報告会で化粧品に関する発表に対して男子学生が質問しており、マスカラなどの単語が出てきたり、化粧品のイメージもついていると感じる場面がありました。なので経験の有無や性別に関係なく、早いうちから授業を行うことで、関心を持つことができ、難しさや必要性を理解できるのかなと思っています。

今までルックスケアの関わりの中で忘れられないエピソードはありますか

精神障害の方に化粧品プログラムの参加を促したのですが、妄想もありお化粧品に毒が入っていると言って受け入れられませんでした。ただ、他の人がやっているところを気にして見ている様子がありました。近くに椅子を置いて「ここで見学しててもいいですよ」と言うと、徐々に近づいてこられて。「お化粧品塗るのはいやだけど、ちょっと眉を描いてみようかしら」となって。そうすると化粧品に毒が入っていると言うことがなくなって、「やっぱり化粧品するのっていいわね」と言うようになったんです。興味がない、やりたくないと言っている方もプログラムの場をみたら変わるんだな、と思いました。

もう一つ、手工芸群とお化粧品群とを比較する研究に参加された方のエピソードです。手工芸がやりたかったみたいですが、ランダム化によってお化粧品の方に当たってしまい、すごく悩まれていました。後で手工芸も経験できることを知ると研究には参加され、お化粧品もされていきました。元々若い頃からお化粧品はしなかった方でしたが、研究で仕方なくお化粧品を始めたところ、ガラッとお顔の印象が変わって、他の参加者や家族から褒められて、最終的にお化粧品を全部揃えられたようです。無理強いすることは絶対ダメですが、人の価値観って変わるんだなと思ったエピソードでした。

ルックスケアに対して消極的な方に対して導入に至るための動機づけのコツはありますか

お化粧品に限らず、「お洋服可愛いですね」「その色すごくお似合いですね」と褒められると、人を意識するようになり、考え方や行動が変わっていくことが多いので、人から褒められる経験がとても大事ですね。あとは、お化粧品を長いことしていない人ほど、いきなり化粧品を顔に施すというのは抵抗があると思います。そういう方には手元のケアから始めると導入しやすいです。乾燥している手をケアすることでツヤツヤされるんですね。そこで「すべすべですね！」と伝えるとすごく喜ばれて、次は化粧水を塗るといった顔のスキンケアにつながることもあります。乾燥していたお顔が、鮮やかに艶が出てくるのでそれをまた褒めて差し上げます。その次は口紅を塗る、という感じで、褒める、やる、褒める、やる

ということを繰り返すことで受け入れてもらいやすいと思います。化粧だけでなく、しわやシミを隠すということから始めるのも抵抗が少ないかもしれません。始めやすいところから始めて、徐々にステップアップしていくといいのかなと思います。後は、ご高齢の方同士であなたやってみなさいよという感じでやり始めた方もいらっしゃるし、交流も大事なのかなと思います。

入院患者さんへ導入するコツはありますか

プログラムで化粧をする場合、1日の早めの時間に設定すると、より長い時間化粧をして過ごすことができます。落とすタイミングは、時間があれば、夕方にもう一度ご本人のところに行って、洗面台で落としたり、クレンジングシートで落とすところまでやれるといいと思います。夕方、OTに時間がなければ看護師さんなど病棟に協力してもらう必要があります。その時にクレンジングシートを病棟に置いておき、その日化粧をされた方のリストを貼っておいて、取りにこられたかどうかをチェックして頂くようにすると病棟の負担も減らせると思います。お化粧することで変わっていく患者さんが増えていくとお化粧することって大事なんだと伝わり、病棟の協力も増えていくかなと思います。

ルックスケアは対象者さんの社会参加にいかに重要でしょうか

人がルックスを整えるということは、人を意識した行為であって、人と交流する時は起きたままの格好ではなく身だしなみを整えることはしていたと思います。そういったことが病気や障害によってできなくなってしまうことで役割遂行に問題が生じます。ルックスを整えることができなくなったままになってしまうと、その状態に慣れてしまうので、早い段階で再びできるようになることが他の作業と同様に大事だと思います。高齢者の研究では、年齢と共に社会参加が減り、お化粧しなくてもいいやとなって、お化粧をされなくなる方が多いです。研究で

は外出頻度が高い人ほど、化粧など身なりを整えられていると言われています。お化粧を再びできるような支援をすると、人に見せたいから外出するというサイクルが出てきます。私たちは誰しも人を意識して作業を行い、人と関わり、集団の中で生きていくので、ルックスを整えることができなくなった方を支援することも作業療法士として重要だと思います。

異分野に挑戦するにはどうすればよいですか

現在のOT教育で行われていることは最低限の内容であり、さらに新たな知見が必要になります。患者さんと向き合い、患者さんの必要性の声を聞き逃さず、しっかりと受け止めることが大事です。そういった生活行為に関連する企業は必ずあるはずなので、連携するといいと思います。そのためには私が日本顔学会で発表したように医療に一切関係のないところでOTの魅力を伝えることをお勧めします。OTの強みって対象者の生活行為をあらゆる角度から支援することなので、例えば高齢者の方が使いやすい商品をOTの視点で考えるなど、領域問わずだと思います。企業に関心を持ってもらうには、いきなり企業に飛び込んで熱く語るよりも、学会や研修会などで患者さんがこのように変わりました、と示すことで説得力が増して一番響くのかなと思います。

最後に一言お願いします

OTの対象は幅広くいろんな作業、生活行為を対象としています。これからもさらに研究が進み、新しい作業療法が出てくると思います。OTの魅力は教科書通りのことだけでなく、新しいことを見つけて開発できる可能性のある職種かなと思います。OTの資格をすでにお持ちの方にはぜひ普段の作業療法にルックスを整えることの視点も加えていただけるといいなと思います。ルックスケア研究会のInstagramも適宜更新しています！

インタビュー③ 居酒屋併設の醸造所経営と作業療法士の二刀流 堀木慎太郎さんを取材して



ほりきしんたろう
堀木慎太郎さんは現在、浅草駒形のSAKE醸造所「木花之醸造所」の経営者と発達領域の作業療法士という2つの顔をお持ちです。作業療法士から飲食業界に飛び込んだ経緯と、今後の展望などを取材させていただきました。

2022年9月 対面にて
インタビューアール 東京都作業療法士会広報部
山崎仁智（文責） 池上洋 森本美和 野村哲朗 水口寛子

居酒屋併設の醸造所経営を始めた経緯は？

32歳の時、作業療法士10年目の節目で飲食業に入りました。主に身体面の回復を支援することよりも、環境面の整備や支援の方に興味があり、車いすの人が外出するということを考えた時に、自分にとって身近な外出支援としての外食に一番関心がありました。32歳で一旦働いていた職場を辞め、3年間は飲食業界で修業をし、35歳で独立しました。最初は日本橋に飲食店を開き、事業拡大も含めて知人と一緒にこの木花之醸造所を現在の浅草駒形に開きました。もともと作業療法の延長として飲食業に入ったので、作業療法の現場にも戻りたくなり、飲食業の経営を続けたまま作業療法士を非常勤で始め、現在は飲食業と作業療法を両立してやっています。

す。木花之醸造所はオープンして2～3年経ちますが、オープンしてからはコロナ禍で苦勞しました。

学校卒業後の経歴は？

卒業後は病院に就職したのですが、いきなり高齢者保健施設の立ち上げを任されて3年間は講習会に参加したり、パワーリハの講習を受けたりして、その施設に新しい設備を導入したりしました。その後グループ病院を3か所勤め、老人保健施設の立ち上げを2か所行いました。老人保健施設で知り合った看護部長の方と一緒に居酒屋を立ち上げました。

高齢者から発達へ分野が変わったきっかけは？

自分にやりたいことが何かと疑問を持ちながら関

わりをもったときに、身体面の回復に偏った支援に興味を持たず、小児分野のような身体的な治療だけではない関わりが必要だと感じました。昔から発達領域にも興味があり支援制度を知りたいと思っていたことや、実際の現場で発達障害が増えている理由を肌で感じたいと思いました。

作業療法士として働いていた中で一番楽しかったことは？

最初の3年間は楽しかった。やりたいことをフル回転でやった感じです。グループでパワーリハを初めて導入して千葉県モデルケースになったり、やりたいことを考えてプレゼンしたり学会発表をしたり。あと、今考えて嬉しかったことは配属された老人保健施設で自分が入る前は3年連続で配属されたスタッフが辞めていたんですが、2年目、3年目が入ってきたスタッフが辞めずに現在も仕事を続けていることです。良い環境を作ったことでスタッフの関係がよくなったし、目に見えて利用者の変化も見られて楽しかった時期があり、充実感があつたし、やりたいこともできた。パワーリハなどお金がかかることもいろいろと一年目からできて有意義でした。

居酒屋併設の醸造所と作業療法士を両立しているからこそ感じる両者の違いは？

リハビリは当たり前のことをして「ありがとう」と感謝される世界。Bestを求める患者さんにgoodやbetterじゃBadになる。それでもbestの答えを求めるのは当たり前で、後輩指導の時によく、「それは悪くはないがよくはない」と指導していました。常にBestを求め、命を扱っているのが医療職で、緊張感とか質が飲食業とは別世界だと思います。ただ、飲食業の世界が難しいのは幸せな人により幸せを提供することにあると思います。手を抜くことはできるけど、そうすると人気店にならない。人気店は常にbestを尽くす。そういった緊張感はあるけれど、人の命を扱っているわけではないので、一緒に働く人を見ていて、飲食業ももっとより良い時間や場所を提供できるはずだ、と感じることがあり医療現場に比べて意識が低いと思うこともあります。改めて医療従事者の凄さを知ることができました。

居酒屋併設の醸造所の仕事は主にどのようなことを？

飲食店を経営しつつ、酒造りにも一部携わっています。お酒造りは酒蔵で修業した別の方が作っていますが、次の販売戦略を考えないといけません。たとえばフルーツを使ったキャッチーなものは売りやすいんです。お酒が苦手な方にも飲みやすいけど、そのようなお酒ばかりではなく、ちゃんとしたお酒として、硬派な酒も造りたいんです。でも硬派だけでは売れない。その辺りは出し方やSNSの運用の工夫が必要です。手に取りやすいフルーツの酒を販売して、興味を持って買ってくれた人が一本だけじゃ、と他のお酒も一緒に買ってくれるようになるような仕組み。あとはまず飲んでもらうために何をすることも考えます。イベント出展や海外にも出展しています。海外は香港や台湾、シンガポール、ヨーロッパ、カリフォルニアに出展していて、香港は来月イベントを開催します。

作業療法士は一般的にはあまり海外を意識しない、日々仕事する中で海外へ視線を向けることは少ないと思います。一方居酒屋ではもっと海外へ視線を向ける必要があります。日本国内ではあまり酒を飲まなくなっている。アジアに広げてお酒を売ると日本国内だけで売るとコストとしては変わらない。むしろ国内よりも海外は原価で買ってもらえるため、海外に視野を入れて経営していかなければいけない。海外に酒蔵を展開していきたいと考えています。

飲食店併設に醸造所を営んで失敗したことは？

好きなこと、楽しいことをやっているんで失敗とは感じないです。コロナ禍に新しくこの店をオープンしたんですけど、前の店は既に閉めていたので、ダメージは少なかったです。

作業療法の経験が居酒屋経営に役立ったことは？

前のお店の時に電動車いすに乗った客が来た時のことです。スロープもつけていなかったんで車いすで入れなかったのですが、身体状況のみで「歩けます？」と聞き、立ち上がりの介助を行いそのお客さんが店内に入れたということがありました。立ち上がりの様子から歩けるだろうと評価ができたのは作業療法士をやっていたからだと思います。



今の店の入り口はわざと段差を残しました。その理由として、車いすでバリアフリーの店を増やすよりも、自分の店の近くの多目的トイレなど、車いすの方でも使えるトイレを認識することが大事ではないかと思います。近くにコンビニがあり、そのトイレが多目的トイレであれば店舗に挨拶をして、24時間使わせてもらう。そのように地域とのつながりを作っておくことが大事ではないかと思います。実際のところ、延べ人数で年間20人前後しか車いすの客はきません。月に1~2人ぐらいしか来店がないんです。一回に10人の車椅子ユーザーが来た、ということはあるけど。個人店が席数を減らしてまで多目的トイレを作る必要はないのではと考えるのが本音です。それよりも、たとえば終電まで食事をしたとして、事前に駅までの最短距離を確認しておいたり、実は車椅子だと遠回りしなきゃいけないんじゃないかとか、駅のエレベーターが遠かったり、車いすでは混雑した終電に乗れない可能性がある、だから一本余裕を持っておく、といったことを予め予測しておくことが大事かと思います。そもそも補助金などを含めてタクシーを使えるようにすることも移動範囲を広げるために重要ですが、車いすユーザーのお酒を飲む方はたいいてい自分の許容範囲を知っているので、多目的トイレの場所さえ事前に押さえておけばよいのでは？と思います。ただ公共機関の施設って夜には閉まってしまうこともあるので、駅のトイレが外にあるだけで行動範囲が広がるのではないかとも思います。

多目的トイレを作るために4席減らして多目的トイレの場所を確保すると、単純計算ですが4席分の損失はお客さん一人当たりの一回の飲み代が4千円だとして $4 \times 4000 = 16000$ 円、1日2回転すると1日あたり32000円、月30日として960,000円、年間12ヶ月で1千万超の損失となります。多目的トイレを作るためにそのような莫大な損失をしてまで個人店が頑張る必要はないと思います。利益優先の飲食店は決して多目的トイレを作らないと思います。国が補助しないと多目的トイレが広がらない。狭い店ほど設置する場所がないため多目的トイレを作る余裕はないと思います。

飲食店を始めた経緯は車いすで行ける場所を増やすため、ということが第一にありました。飲食の経営をして車いすの方の夕食の実態を知ること、飲食店だけでなく、地域のこと知ることができる。作業療法士はどの業界にいてもいいと思うので、そういった他の業界にチャレンジしてつながりを作るといいと思います。他の業界から医療へつながるのは難しいと思うからです。

今後、酒屋での経験を何に生かせそうですか？

障害者雇用をしている団体のコンタクトをとったこともあり、そこのお米を使用したお酒を造ることを考えています。将来的にはお店で障害者雇用をすることも考えています。

興味があっても他の業界になかなかいけない作業療法士がした方がいいことはありますか？

行動力が大事かなと思います。

堀木さんの夢は何？

居酒屋を開いたときに東京オリンピックの開催が近づいていて、老若男女問わず海外の人も車椅子ユーザーも関係なく店に来て酒飲んでいる姿を見たかった。その絵・映像を見たかった。それが見られたら死んでも良かった。それ以外は飲食業界でやりたいことはできたかな。あとは自然と広がっていくと思っています。誰が来ても楽しめる環境を作りたい。

今後の展望はありますか

後は酒造りツアーを考えている。昼は酒造り、夜は居酒屋に、造ったお酒はお土産にして行けたら



いい。浅草ブランドの酒を造り、いずれは海外に拠点を移していきたい。

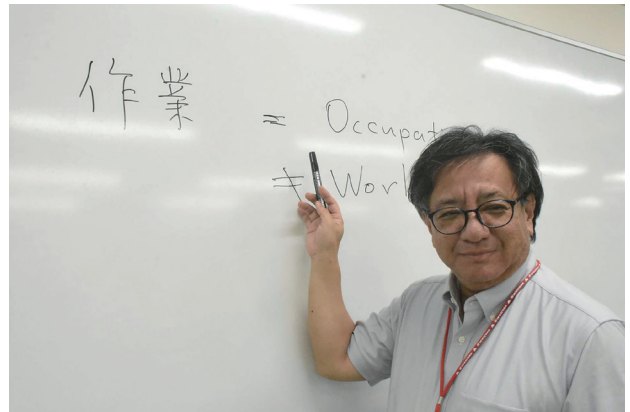
作業療法士としては、発達障害のアプローチを一つの企業と連携してやっていきたい。子どもたちにとって集中して達成感があり、満足できるものを提供していきたい。今、詳しくは言えませんが、物を作りながらアプローチすることを具体的に考えています。

取材を終えて

地域で障害者を見ていこうと、色々なところで耳にしたいと思います。医療業界だけで生活していると、他の視点を知る機会がなく、医療従事者として障害者の寄り添うことはできると思います。飲食業界あるいは他の業界で話を聞くことで違う視点を見ることができると共います。お互いの持ち味を知ること、新たな物や場所を作れるように感じました（山崎仁智）。

取材に伺うまではバリアフリーの居酒屋さんかな、と思っていました。しかし、堀木さんのお話を聞いて全く違うことがわかりました。一つの飲食店の中のトイレがバリアフリーになっていても結局車いすの方はそのお店しかいけない。そうではなくて、隣のコンビニのトイレを気軽に使えるように普段から「うちのお客さん来るけどよろしくね」と挨拶に行く、町全体にもっとバリアフリートイレが増えればいい、というお話だったので、居酒屋さんから地域づくりという大きな視座をもっておられたことに気づかされました。（水口寛子）

多様な価値観の社会の中でこそ作業療法の魅力が 映えるかもしれない



東京福祉専門学校 濱畑法生

今回は3名の、作業療法士としては異色のバックグラウンドを持つ方々のインタビューのまとめを依頼されました。記事を読みながら、こんなに面白く仕事ができている人は幸せなんだろうと、自然に自分も笑顔になってしまいました。皆さんをご紹介がてら、作業療法の魅力についてお話しできればと思います。

まず、お一人目は、芸能活動をしながら作業療法士の臨床も行っている竹野留里さんです。

4歳の頃に家族と民謡を習い、テレビ番組出演をきっかけに芸能界入りされたということです。芸能界とOTのどちらを選ぶか、ということではなく、ええい、どちらもやってしまえ！という決断は、なかなかできないことだと思います。でもこうした経験が、対象とする人々の可能性を広げることにつながると思います。

芸能活動とはちょっと違いますが、私も最近はアニメを見るようになり、言葉以外の表現の方が相手に通じやすいことがあるという経験があります。特に学生のような若い年代には有効です。授業の中で、障害を題材にしたアニメを用いて説明すると、興味や理解力を高められる経験があります。いまVRがはやり始めてますが、身体的障害があって移動制限があっても、VRを用いたメタバースの中では自由に旅をしたり、イベントに参加することができたりします。小さいうちに亡くなった子どもたちのその後の世界を描いた作品では、小児科勤務時代を思い出し、ああ、こんな風に今どこかの世界であの子たちが幸せに過ごしてくれていたらいいなと、涙

して考えたりできました。

想像力は、作業療法士にとってとても大切な力だと思います。その反対の、事実を追求する力も大切です。このどちらか、事実だけでも、想像だけでも、対象者にとって適切な提案にはならないでしょう。私たちが未来を夢見て前に進むように、作業療法の対象者も将来があり、それを笑って考えながら前に進む力を私たちは提供する役割があると思います。

竹野さんのように人前に出て何かを演じる、ということは、そうした想像力と自分の技量の両方が試される場なのではないでしょうか。そういえば、私が実際に出会ったOT学科に入学する人の何割かは、高校で吹奏楽部にいた経験がありました。楽器を吹く、というスキルの追求と、音楽を聴いてくれる相手の心を満たす想像力を使う場面を経験していると思います。だから作業療法士は、対象者への理解が深く、様々な技術を駆使することができるので、介入した相手からの満足度が高い職業なのだと思います。

お二人目はルックスケア研究会を立ち上げられた 石橋仁美先生です。

石橋先生は現在東京工科大学の教員をされていますが、以前勤務されていた臨床で化粧の持つ心理的効果についての実践研究を始められました。

ルックスケアは、私も2000年ころ秋田県のある老人保健施設（老健）で行った経験があります。まだルックスケアという言葉も知らず、地方の老健で恐る恐る行っていました。私の時は、外面を整えるということは誰かに会う、外に出かけるという行動につながることを主として考えていました。寝たきり・寝かせきりの背景には、その日にやるべきことがない、また外部の会うべき人もいないからだと考え、せめて月の行事の時だけでも居室から出やすい環境を作ろうとして外部の人に入ってもらおうとすると、恥ずかしいから嫌だという反応がありました。それではどうしたら恥ずかしくないか、ということを検討すると、対象者のほとんどが女性であったので、衣服や化粧が必要なのではないかと考えて実施しました。ここは先生のお話のとおりです。ですので、社会性のツールとしてももう少し注目されてもい

いのではないかと考えています。今の若い学生は、男性であっても登校時に化粧をする子もいますし、そもそも男性だから、女性だからなど、もうどうでもいいことだと個人的には思っていますので、社会を構成する中心がそういう価値観に変化していけば、おのずと注目されるのではないかと思います。

私もここ数年大規模な夏と秋のコミケ（同人誌頒布会）に行きますが、そこでは自分をメタモルフォーゼする「コスプレ」という表現が観られます。普段の自分と違う自分を表現したいという欲求も、人の心の奥にはあるものです。また、古来から世界各地の文明の中にも、普段とは違う様相で神や自然を讃えるという姿も残っています。

そこまで話を広げなくても、ハレの日のために、あるいは普段の肌のケアに、化粧という行為は日常的な生活にかかわってくる行為だと思います。石橋先生が以前からこうしたルックスケアという臨床実践に取り組みされてきたことは、もっともっとOTの中に広がらなければならないことだと思います。

3人目は、居酒屋併設の醸造所経営と作業療法士の 二刀流、ということで堀木慎太郎さんです。

堀木さんは卒業後作業療法士として就職し、施設開設というハードルの高い業務を数多く手がけられてから、ご自身で飲食業を開業し、その上醸造所まで開設されたという方です。

飲食店の経営を行うということは、言い換えれば多角的な観点から情報を統合して最適な判断をする、ということになるかと思います。これはマネジメントという手法を用いて行われます。OTでも「生活行為向上マネジメント」という概念がありますが、これをヒト・カネ・モノと情報を統合していくものが経営的なマネジメントとなると思います。OTの生活行為向上マネジメントは、それがなければ事業がやっていけないという性質のものではなく、実施すれば診療報酬上の加算が取れるというものです。

しかし店舗経営は、診療報酬に守られているわけ

ではありません。売り上げと経費のバランスが崩れれば事業そのものが成り立ちません。そうした厳しい環境の中で、最適な解を見つける能力がなければ、すぐに立ち行かなくなってしまう。ほとんどの作業療法士は、診療報酬や介護報酬といった守られた環境の中で物事を判断しますので、これがあつた方がいい、あるべきだ、という理想論で話をしますが、それでは成り立たない世界もたくさんあります。その誰も守ってくれない世界で、作業療法士として働いていける手法を考えていかなければ、作業療法の世界が広がっていきません。医療と福祉が中心になるのはよしとして、その中に入りきらない領域にも、作業療法を広めるためには、卒前に学んだ知識では到底足りません。若いOTの中には保健医療学だけでなく、MBA（経営学修士）や他分野の学位

を取得する人も増えてきています。そうした知識や経験を元に、まだ作業療法がかかわっていない領域にどんどん広がってほしいと思います。

現状で全ての店が多目的トイレを設置するのは、食品衛生法が改正になって設置義務がつかない限り難しいでしょう。堀木さんの言う通り、「あればいい」レベルの話ではありません。私たちが自分の立ち位置を確認するだけで物事の見え方は変わります。

そのような物事の見え方を変えるトレーニングが、これから私たちには必要になってきます。5年後には間違いなく社会は大きく変化します。それまでに、今の立ち位置以外からOTを俯瞰できるようになれますか？

そして、車椅子に乗ってしようが、多動だろうが、認知症があろうが、人に会うのが少しだけ苦手だろうが、自分にご飯を食べたい、飲みに行きたいと思つたときに安心して行くことのできるお店が近くにあり、そんな世界で生きていきたいと思いませんか？

以上、領域は違いますが、3人の先生から大変興味深いお話を聞きました。私もOTになってかなり年月が経ちますが、OTになったばかりの若い人、いまこれからOTを目指している学生はとても柔軟的に世の中の現象をとらえていると思います。それを妨げるのが、常識や経験というものではないかと思つています。これからも、こうした方向性で発展を期待するのであれば、過去にとらわれず、まずはトライして、それから考えて進んでいくという姿勢と、それを頭から否定しないで温かく見守る姿勢、というものが大切なのではないでしょうか。

私も、まだまだいろんなことにチャレンジしたくなりました。今はDTMで作曲を始めました。

私はたまに過去に担当した人と飲みに行く機会がありますが、意外と周囲の皆さんが何か手伝いたいと思ってくれることも多くて、その気持ちが伝わってくることがあります。私も彼も、そんなときは甘えて「すみません、みんなで車いすを持ち上げてもらっていいですか？」とお願いするようにしています。だって、それが当たり前前のことですから。

ちなみに、どぶろくは買わせていただきました。今から届くのが楽しみです。



OTOの発行も今回で第5号となりました。OTOの前身でありました2014年、2015年の新春特別号を加えますと以下の通り7号となりました。これらバックナンバーは東京都作業療法士会ホームページ、各種ダウンロードよりダウンロードし閲覧可能となっております。

OTO	2014年(新春特別号)	
OTO	2015年(新春特別号)	「作業療法と道具」
OTO	第1号	「就労を支援する ～作業療法士と就労支援」
OTO	第2号	「ICTはもうすぐそばに」
OTO	第3号	「障害のある方のためのスマートフォン・タブレットアプリ」
OTO	第4号	「他の職業を経て作業療法士になった方へのインタビュー」



https://tokyo-ot.com/document_cat/oto

※ OTO に掲載されている写真は、ご本人の同意を得たうえで掲載しています。

◆東京都作業療法士会 事務局

〒160-0022 東京都新宿区新宿5-4-1 新宿Qフラットビル501

TEL : 03-6380-4681 FAX : 03-6380-4684

◆東京都作業療法士会ホームページ <http://tokyo-ot.com/>

◆東京都作業療法士会ホームページ窓口 postmaster@tokyo-ot.com

※お詫びとお願い：現在事務局での電話対応が困難な状況にあります。

ご質問・ご連絡は、FAX・メールにてお願いいたします。